

大相撲と外科医の世界

～調和と寛容の文化を求める～

政局の混乱もあり、閉塞感がただよっている。八百長問題が発覚し、国技としての大相撲も土俵際まで追いつめられた。この事件で気になったことは、幕下以下の力士の生活にあり、無給で切磋琢磨、技を磨いているとの報道にあった。かつての大学での外科医の研修医生活に似たところがあり、日本の徒弟制度が社会の常識として通用した時代の遺物に思いを馳せた。

昭和50年代、医学部を卒業して5年目、大学病院での研修中の私の毎月の給与は約5万円であった。女房と子供が二人、アパート代が3万5千円。どこに首をひねっても、生活が成り立つはずがなかった。アルバイトの連続、その日暮らしではあったが苦痛ではなかった。一人前の外科医になるための修行ととらえていた。格安の日本の医療費は、このような文化に支えられていたとも言える。

徒弟制度に支えられた大学の医局制度も弊害だけではなかった。先輩（親方）の誘いもあり、各々の診療科、あるいは基礎医学へと進路が誘導された。外科入局（入門）と同時に二組の「くじ」が用意されていた。指導医を決める「くじ」と最初の研修病院を決めるための「くじ」である。指導医は、まさしく人生の師であり、教師であり、反面教師のこともあった。出会いがあり、将来の道筋が描かれていった。

急速に進行する少子高齢化社会の到来は確実に予測できる現象であった。社会の仕組みも、この少子高齢化社会に照らし併せて改革が求められた。教育、医療、介護、税制、社会保障制度、政治、経済等のすべての枠組みが対象であった。しかし、多くの課題が先送りされた。「先送り」の伝統は日本人のもつ特徴かもしれない。

相撲界の改革は、深刻なまでに遅れをとっている。少子化世代の若者のライフスタイルが大きく変化していく時代に、旧態依然とした閉ざされた社会である。「石の上にも三年」等といった用語は、現代用語辞典からは消え失せた。研修医生活はアルバイトでしのげたが、体の大きな力士にはとるべき術がなかった。

宗教に根ざした文化をもつ欧米、中近東を含めた他の国々とは異なり、日本における少子化社会の目指す方向性は、その基盤を何処へ求めるべきであろうか。欧米の制度、手法を即刻まねるとひずみが生じる。合理主義思想の中に、「年功序列」、「徒弟制度」の良い側面をも加味するところに調和のとれた、安定した日本の文化、社会が築かれるのではないかと考える。曖昧さの中の調和の美しさも肯定されるべき寛容な社会も存在してもいいのではないだろうか。経済優先の競争社会の中に、世代を超えた「調和」と「寛容」を演出する制度・文化の創造である。団塊の世代の最期のつぶやきであろうか。